マルメ大学研修報告レポート

医学部　保健学科　理学療法学専攻
小笠原沙映

今回訪問したマルメ大学には看護学部しかないが、他大学と連携するなどして、医師、看護師、理学療法士、作業療法士などの他職種が相互に連携して治療をする勉強ができるように工夫がなされていた。マルメ大学にはＫＵＡという施設があり、そこでマルメ大学の看護学部の学生や、他大学の医学部、看護学部の学生などがチームを組んで二週間実習をする。このＫＵＡでの実習で学ぶのはコミュニケーションの仕方である。患者にどのような治療をするのかなどを話し合うチームミーティングの時間が毎日設けられ、そこで医療スタッフ同士が話し合いながらコミュニケーションを学んでいく。医師や看護師、理学療法士、作業療法士が一緒に実習をしていると聞き、患者にそれぞれの職種がどのような治療を施すのか、など治療を重視して勉強しているのではないかと考えていたが、治療方法を決定する過程の話し合いなど、コミュニケーションのほうがより重視されていることに驚いた。このように学生のうちからコミュニケーションの方法などを学んでおけば臨床に出たときにとても役立つだろうと感じた。広島大学には、医学部、歯学部、薬学部がそろっているが、互いに連携してチーム医療を実践的に学ぶ機会はほとんどないのでうらやましいと感じた。また、自分の専門分野からの見方だけではなく、様々な視点から患者や治療に対する意見を聞けることも良い経験だと感じた。将来、医師などとうまく連携をして仕事をするには、自分の専門だけではなく、他の職種の仕事も理解することが不可欠であると学ぶことができた。この施設を見学し実習をしている学生を見て、実際に現場に出て働いているのと近い感覚で勉強することができる環境をうらやましいと感じたし、学生のうちにこのような経験を積めば、卒業して働くことへの不安が少ないのではないかと感じた。

作業療法士の方に話をうかがい、リハビリに使うたくさんの用品を見ることができた。リハビリに使う用品は日常生活で不便がないように様々な工夫がされていることを知り、身体に障害がある方は日常生活のどんなことを不便に思うのかも知ることができた。作業療法士に関する知識はほとんどなかったため、作業療法士の仕事への理解につながった。

スウェーデンは多くの移民を受け入れている国であり、医療の場面でも人種の多様性に関することで問題を抱えていることが分かった。日本は外国人を受け入れることに寛容ではないのでこのような問題は意識されることが少ない。わたしは、スウェーデンは社会福祉制度が充実しているという強い印象を持っていたので、問題点などは少ないのではないかと考えていたが、日本にはない問題をスウェーデンが抱えていることを知り、歴史や文化の違いによって医療にもさまざまな問題が生じうることを学んだ。

日本とスウェーデンでは医療従事者の役割や仕事に違いがあることも分かった。日本では基本的に医師の処方がなければ看護師や理学療法士、作業療法士は医療行為を行うことができないが、スウェーデンでは専門分野のスペシャリストである看護師が多く存在し、患者は理学療法士や作業療法士に医師の処方なく直接アクセスできる制度となっていた。この制度では病院を何度も訪れる必要がなく、無駄な医療費の削減につながっているのではないかと感じた。

スウェーデンでは 79 パーセントの高齢者が介助を必要とせず、自宅で暮らしていて、家族や親戚のサポートが非常に重要であるが、日本と同じように家族内で高齢者をサポートすることを負担に感じている人もいることを知った。高齢者をどのように見守っていくのかは世界で共通する問題なのだと分かった。介護を専門とする看護士がいることは素晴らしいと感じたし、日本にもこのような制度があればより良い介護が実現できるのではないかと感じた。

日本では医療従事者のバーンアウトについて少し勉強していたが、マルメ大学ではどのような方法で医療従事者のバーンアウトを防ぐことができるのか、具体的な一つの方法を学ぶことができた。Clinical supervision は臨床で経験した問題や苦しみなどについてグループ内で話を聞いてもらい、互いに意見を出し合ったりして、お互いの理解を深めることによって医療従事者の苦しみを軽減する取り組みである。経験した問題に対する明確な答えを出すことができず、かえって加重となってしまう、臨床の現場で実際に clinical supervision のための時間を確保することができるのか等の問題点はあるが、患者や遺族だけではなく、医療従事者のケアも大切なことだと学ぶことができた。

また、マルメ大学の学生の年齢層が幅広く、大学に入学する前は看護師とは別の仕事をしていた学生や、旅をしていた学生もいると聞いた。日本では、高校を卒業したら大学に進学するか、就職する若者が大多数で、旅に出るということは聞いたことがなかった。世界にはさまざまな価値観があり、時間の使い方も人それぞれで、進学や就職するのが普通で当たり前だという自分の考えを見直すことができた。わたしはずっと日本に住んでいて日本のさまざまな制度や考え方に大きな疑問を持ったことはなく、これが当たり前だと感じていたことが、実は世界の基準とは大きくかけ離れていて、日本が特殊だと捉えられることもあるのだと知った。

マルメの街を歩いていると、ベビーカーを押している人や小さな子どもと一緒に歩いている人の多さに驚いた。スウェーデンは育児をする人への保障が充実していることを知り、子どもを育てやすい環境を作ることが有効な少子化対策になるということを学んだ。

わたしは今回の研修に日本での自分の生活している環境を見直すことを目的として参加し、同じ大学生という立場で立派に実習をこなす学生や、実践的な学習のできる素晴らしい環境を見て、普段勉強をしている大学や自分の勉強に対する姿勢を見直すことができた。また、自分の専攻以外の仕事についてももっと理解しなければいけないし、それが将来仕事をするにあたってとても重要なことであると気づかされた。スウェーデンの医療制度やそれに関わる歴史について学んでいくなかで、日本はどうなのか？と質問されても明確に答えることができず、自分が普段生活している日本についての知識がないことを痛感させら

れた。今回の研修への参加で、たくさんのことに興味を持ったし、知らなければいけないこともたくさんあると気づかされ、視野を広げることができたと感じる。この研修での経験をこれからの生活にいかしていきたい。
お世話になった皆様、ありがとうございました。